



## 現代日本語の敬語における丁寧さの研究

著者	鄭 惠卿
著者別名	チョン ヘキョン
内容記述	筑波大学博士（文学）学位論文・平成3年12月31日 授与（乙第725号）
発行年	1991
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/4475">http://hdl.handle.net/2241/4475</a>

氏 名(本 籍) <sup>ちよん</sup>鄭 <sup>へ きよん</sup>惠 卿 (韓 国)

学 位 の 種 類 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 博 乙 第 725 号

学位授与年月日 平成 3 年 12 月 31 日

学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当

審 査 研 究 科 文 芸 ・ 言 語 研 究 科

学 位 論 文 題 目 現代日本語の敬語における丁寧さの研究

主 査 筑波大学教授 芳 賀 純

副 査 筑波大学教授 文学博士 北 原 保 雄

副 査 筑波大学教授 Ph. D. 草 薙 裕

副 査 筑波大学教授 Ph. D. 中 右 實

副 査 筑波大学教授 森 野 宗 明

## 論 文 の 要 旨

日本語における敬語現象は語彙、文法、文体、文字、音声などの言語形式の全側面に及ぶ「敬語体系」を成すとされ、このような体系を説明する多くの理論が提出されているが、敬語現象そのものも時代とともに絶対敬語から相対敬語の方向に変化してきた。本論文は、従来の敬語の諸理論における丁寧さの表現の位置づけを詳細に検討し、その中で敬意と丁寧さの区別を立てる説と敬意の種類の別として丁寧さを立てる説とを比較して、後者の立場が現代日本語の敬語使用を説明するのにより適わしいということを、独自の実験的・実証的研究と談話資料の分析を通して言語学、特に語用論の立場から裏付けた研究である。論文の構成は次の通りである。(原稿用紙1285枚)。

序 日本語における敬語研究の問題点

1. 日本語の文表現法の構造的特色からみた敬語
2. 従来の敬語研究における問題点と本研究における敬語の捉え方
3. 敬語表現における敬意と丁寧さ
4. 敬語表現の丁寧さと段階
5. 敬語表現の丁寧さとその段階の研究手法
6. 三種の敬語要素の共起関係にみる敬語表現の丁寧さ
7. 談話における敬語表現の丁寧さ
8. 現代日本語の敬語法における対者敬語化
9. 結 論

「序」は本論文の構想を述べた部分で、鄭氏は丁寧さに関する最近の言語学の研究成果もとり入れながら、現代日本語の敬語理論の中で丁寧さの表現がどのような位置を占めるかについて言語運用の面から実験的方法と談話資料の分析を通して解明する方向を提案している。

第1章「日本語の文表現法の構造的特色からみた敬語」から第3章「敬語表現における敬意と丁寧さ」までは、主として文献に拠りながら従来の敬語理論の比較と検討を行っている部分である。第1章では、日本語の文表現が「文末決定法」とそれに随伴する「情緒的展開」の支配を受け、特に「場面依存性」が高いことに触れ、このことが敬語使用にも反映しているということを指摘している。

第2章「従来の敬語研究における問題点と本研究における敬語の捉え方」では敬語の諸定義とそれらの拠って立つ前提を比較・対象した上で、敬語という用語を敬意を示す表現に限る狭義の敬語として理論化するのではなく、「伝達行為における言語主体の対人関係的コンテクストに対する情意的・心理的態度が言語の上に現れたもの」とする広義の敬語を敬語とする立場をとっている。この後者の立場をとると、従来狭義の敬語の語形式として考えられてきた、敬語を「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」さらには「丁重語」「美化語」などと仕分けた上であらためて「尊敬語」から「丁寧語」までを、あるいは「美化語」や「丁寧語」までを敬語と呼ぶ場合に生じる困難を避けることができるが、そこで生じる新しい問題は敬語表現の上で「丁寧語」には「尊敬語」や「謙譲語」などに対してどのような位置付けが与えられるべきかということである。そこで、鄭氏は、この問題を解決するために、第3章において、従来の敬語理論で「敬意」と「丁寧さ」の区別を立てる説とそれを立てない説を分け、別に氏が日本人の大学生を対象にして行った調査の結果から、後者の説を支持する考えに至っている。調査は同一の「話し場面」で尊敬、謙譲、丁寧の3通りの気持ちを「普通」に込めて発言する3通りの条件を与えて、それぞれの条件に応じてどのような敬語表現の文形式がみられるかを求めたものである。その結果、3種のいずれの気持ちを込めた場合でも、その表現では「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」が共起し、敬語と丁寧さとの間には相補関係があり、とりわけ主文末末において「丁寧語」の出現が高いということが確認された。

第4章「敬語表現の丁寧さと段階」から第6章「三種の敬語要素の共起関係にみる敬語表現の丁寧さ」までは、第3章の調査方法にさらに手を加えて、敬語表現における丁寧さのレベル（段階）を変えることによって第3章でみた共起現象をより明確な形でとらえ直したものである。第4章では、敬語表現の丁寧さに段階があり、その段階が「敬語要素」の使用率と相関することに触れ、第5章「敬語表現の丁寧さとその段階の研究手法」では、氏が考案した「コード切り替え」の実験的研究法の手続きについて説明し、「丁寧さ」の段階を「くだけた言い方」「普通の言い方」「丁寧な言い方」の3段階に被験者に切り替えさせることにより、「尊敬語」「謙譲語」「丁重語」「美化語」と「丁寧語」との共起関係がより明確な形で示されるということを予想している。第6章「三種の敬語要素の共起関係にみる敬語表現の丁寧さ」は、この「切り替え」実験の結果を示しているが、ここではこれら敬語要素間の共起が生じており、その共起関係が調査したすべての個別の表現について示されている。そこでは、丁寧さのレベルが高くなると、「丁寧語」の使用は高まり種類も多様に

なるが、それと同時に、「尊敬語」や「謙譲語」との共起の比率も増大し、また他方で一般に「尊敬語」の生起が高いと「丁寧語」の生起も高いということが示された。これらの結果はいずれも敬意と丁寧さを区別する立場よりは区別しない立場の敬語理論を支持していることになる。

第3章と第6章の結果は特殊な実験的調査によって得られたもので、敬語現象の特徴を純粋な形でとり出しそこにみられる傾向を数量的に分析するという点においてはすぐれているが、他方では人為的な方法の介入による誤差も生じるという欠陥がある。従って、この欠陥を補うために試みられたのが第7章「談話における敬語表現の丁寧さ」のテレビ対談の分析と現代作家による小説の多様な場面における対話の分析である。この分析からは、対談の時間内で対話者が相手との心理的距離、話題の段階などに応じて丁寧表現を含めた敬語のレベルを変化させたり、場面に応じた敬語の微妙な利用の仕方がみられるというような知見が得られたが、分析の例からは現代日本語における実際の敬語使用において占める「丁寧語」や「美化語」の比率が高く、いわゆる対者敬語化あるいは相対敬語化への現象がみられるということが確かめられた。この傾向は第3章と第6章における調査結果を補いかつ裏付けるものと考えることができる。

第8章「現代日本語の敬語法における対者敬語化」では、再び実験的調査によって、現代日本語の敬語表現が「対者敬語化」の傾向をたどっていることを確かめている。ここでは話し手である大学生が、自分とは身分的に上位になったり下位になったりする聞き手に、その聞き手にとってまた上位になったり下位になったりする人物（話題主）について敬語表現を行う場合、聞き手が自分と同等か以下である場合には話題主に対する敬語要素の使用率は話題主の身分にかかわらず一般に低いが、聞き手の身分が上位になるにつれて話題主に対する敬語使用の比率が高まるということが示された。この傾向は、氏が韓国の大学に対して行った同一内容の調査結果でも示されたが、これらの結果も第6章までの結果を間接に支持するものである。

結論として第9章では、本論文の各章で示された結果が要約され、今後の研究の方向として被調査者の範囲や敬語表現における場面の拡大、敬語の音声的側面の研究、外国人に対する日本語教育への応用などが挙げられている。最も重要な結論は狭義の敬語の研究の立場から広義の敬語の研究の立場への移行の必要性が本論文を通して裏付けられているということである。

## 審 査 の 要 旨

本論文の特徴は、現代日本語の敬語表現において丁寧さの表現である「丁寧語」がその表現全体の中で他の敬語表現要素である「尊敬語」、「謙譲語」、「丁寧語」、「美化語」などと独立して個別に作用するのではなく、それからの要素の生起と特定の相互関連性を持っているということを単に文献の上での考証にとどめずに、実験的方法と談話資料の分析を加えて確かめたことである。このことは、わが国の従来の敬語理論において、敬語の意味を敬意にのみ限る狭義の敬語理論に対して、敬語の意味をむしろ広くとってその中に「丁寧語」も含めて「尊敬語」以下「美化語」までを含ませる広義の敬語理論を支持する結果を得たということを意味している。以下の結果は、鄭氏が本論

文の中で述べているように敬語表現の他のジャンルにおける場面や文表現についてもさらに確かめて行く必要はあるとしても、本論文の独自のすぐれた貢献であるといえる。本研究においては実験的研究方法として「コード切り替え」法を用いて成果に導いている。この方法を敬語研究で用いることに思い当たったのはすぐれた着想である。

なお、本論文は日本語を外国語とする著者によって極めて水準の高い日本語でまとめられたもので、各章の記述は丁寧でしかも豊富な文献で裏打ちされている。しかし、そのために逆に章間に記述の重複が生じ文章が少し冗長になっている部分があるので、その部分は著者の論点に添って手を加えることが望ましいだろう。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。